

日の丸=侵略と抑圧の象徴 を我々の手で葬り去ろう!

極反動としての本質を増々あらわにし、右翼的政策を次々と押し進めようとしているあの総長沢田が、到々今年から祝日に本部正門に日の丸を出し始めたのです。2月11日、この日は彼にとって重要な日です。紀元節奉祝を自分の総長在任中に向か向でせやろうと、彼は固く決意して日の丸を正門前に立てさせたことでしょう。しかし、彼の目論見はいとも簡単につぶされてしまいました。新聞報道にもあるように、向者が日の丸に赤ペンキをぶっかけたのです。総長沢田は、この事件を犯罪とみなして警察に告発しました。京都府警・川端署は、機動隊、制服警官多数を動員し、敵視体制の中で現場検証を行ったとのこと。我々は、日の丸に赤ペンキをぶっかけた人々の行動は正しいことだと考えます。我々は、学内世論を喚起し、再び日の丸を立てさせてはならないと考え、すべての教職員、労働者、学生のみなさんに訴えるものです。

日の丸は本当に我々の旗なのか?

戦前、日本はアジアの地を侵略し、731部隊による細菌兵器開発、人体実験、南京大虐殺などの悪行を行い、2000万人以上の人々を殺しました。占領した土地では、日の丸を立て、君が代を奏で、原地の人々に「天皇陛下万歳」を叫ばせました。多くのアジアの人々にとっては、日の丸は抑圧と侵略のシンボルに他なりません。このことは、侵略の側にいた日本人の人々にとっても同じはず。また、暗い軍国主義の時代を想起させるものでもあります。大きな日の丸を掲げる右翼の街頭宣伝カーを戸の当たりにした時に抱くあの言い知れぬ不安と苦々しさが向よりもそのことを雄弁に物語っています。逆に言えば、現在よりも戦前の方が良かったと思う人々、歴史を逆もどりさせたいと思っている人々のための旗なのです。2000万人以上のアジアの人々、そして200万人以上の日本人の人々の血でどす黒く染めあげられた日の丸をどうして認められるでしょうか。日の丸を認めることはアジアの人々への再度の蹂躪であり、国内の内外の死者に対する冒瀆であると思えます。

紀元節復活、天皇制強化、そして軍備増強

紀元節に賛成でも反対でもない、要は祝日が多ければそれでよいと思っている人は結構多いようですが、本当にそれでいいのでしょうか。こんな発言は早晩公言できなくなるくらい右傾化のスピードは急速です。2月11日の紀元節奉祝会に出席を拒否した坂田俊謙院議長の場合はどうでしょうか。自民党首脳は、地位にひびくと露骨に同喝を加え、右翼は個人テロリストを公然と宣言しています。祝うか祝わないかがすでに踏絵となっているのです。このような情勢の中で、支配者は天皇を政治の前面に登場させ、国民統合・翼賛体制のなめにしようとしています。元号法制化をなし、靖国神社の国営化をねらう政府の最終的な目標は憲法改正・天皇の元首化にあるといえるでしょう。一方、軍備は拡大する一方であり、GDP1%枠突破を中曽根は公然と表明しています。天皇制の全面的な復権と軍備拡張、これは何を意味するのでしょうか。それは戦前の日本が歩んだ道、すなわち侵略戦争への道です。多くの罪のない人々を殺し、多くの若者を戦争へとかりたて「大死に」へ導いた戦争。戦争でもうける一握りの支配者の私利私欲のためだけの戦争。そう、「いつか来た道」に我々は立っているのです。

再び、本部正門前の日の丸について

京大は「反戦自由の誓」だと思っているみなさん、もういい加減に目をさまして下さい。毎日の生活に追われ、目先の目的だけに振りまわされているみなさん。(かく言う我々もそうなのですが……)「いつか来た道」はルーピング・ワークです。反対に歩み出さずいざり流されてしまうのです。反対に歩み出す第一歩は、日の丸を立てさせない運動をつくり、支揚し、学内の世論を盛り上げることにありと思えます。

京大で、紀元節=建国記念の日
に反対する人々の会